



進化を続ける「北東アジア交流の翼 in しまね」 ～今年度の開催状況から見えてくること～

島根県環境生活部文化国際課 主任 細木 由紀子

島根県では、2025年8月22日から6日間、中国・韓国・島根の若者たちが参加する国際交流イベント「北東アジア交流の翼 in しまね」を開催しました。このプログラムは、2002年から開始し、今年で23回目を迎え、これまでに約600人の青年が参加してきました。



交流の翼、いよいよ始まる!! (開会セレモニー)

テーマは「海の環境保全」

毎回、北東アジア地域における共通課題をテーマとして設定し、そのテーマに因んだ交流を行っています。

近年SDGsの関心が高まる中、今回は「海の環境保全」をテーマとし、青年たちに若者らしい考察と提言を求めすることにしました。

「百聞は一見に如かず」まずは、出雲市内のひろげ浜の海岸を歩きながら、実際にどのような海洋ごみが漂着しているかなど現状を確認しました。外国からのごみも多く、海の環境保全が各国共通の課題である「気づき」



足元には海洋ごみがたくさん (ひろげ浜)

となりました。

それでは、今回のプログラムの特色について、3点ご紹介したいと思います。

地元の高校生と初の共同企画

今回は、初めて、環境保全などのクラブ活動をしている出雲西高等学校の生徒との共同企画にチャレンジしました。冒頭、出雲西高生主導で自己紹介やゲーム、クラブ活動の紹介があり、和やかな雰囲気での交流が始まりました。地元高校生と共同で活動したおかげで、生徒たちが日頃取り組んでいる海岸清掃ボランティアの活動の話を知ることができ、日常的な奉仕活動の大切さを実感する機会となりました。これまでのやり方にこだわらず、柔軟に対応した点が功を奏しました。

その後、高校生と一緒に、「海ごみについて考えてみよう」をテーマに島根県廃棄物対策課から講義を受けました。なぜ海洋ごみが各国に漂着するのか、海洋ごみをもたらす影響はどのようなことがあるのかなど、現状を学びました。

続いて、海洋ごみだったペットボトルキャップを再利用してアクセサリ作り挑戦しました。ごみの再利用の仕組みを学び、グラデーションのあるカラフルな自分だけのアクセサリを作りました。



ペットボトルのふたなど漂着ごみを使ってアクセサリ作り



翌日は、前日の講義や体験をもとに、外国青年と島根青年のグループディスカッションを行いました。グループごとに海洋ごみの処理・海洋資源の保護・海洋汚染対策などの現状を整理し、課題に対する解決策をまとめました。法律の制定や罰金・逮捕などの刑罰を設けてはどうか、3カ国共同でリサイクル推進のルールをつくらうなど様々な対策が提案されました。海の環境保全を3カ国の共通課題として捉えるとともに、日々の生活の中で、ごみの削減や使い捨てプラスチックの使用を控えるなど一人ひとりができることから始めようと決意を新たにしました。



議論白熱!!



いざ、発表!!

青年自ら企画・運営する

2つ目の特色は、島根青年たちが中心になって事前にこのプログラムの企画をした点です。

まず、彼らは、自己紹介、交流活動、まち歩きなど、各コマの担当を決めます。事前研修におけるファシリテーションを通じて具体的な活動内容を決めていきます。

外国青年の日本語レベルは、様々です。誰でも理解しやすいように、簡単な言葉や文法で表現された「やさしい日本語」を使うよう心がけました。

このほか、プログラム全体を通じて、自分たちが積極的に話しかけ、国や男女を問わず、一人で過ごす人が居ることのないよう「心配り」をすることとしました。

島根の人・もの・自然に直に触れる

3つ目の特色は、ホームビジットやまち歩きなど外に出かける企画がある点です。特に、ホームビジットでは、訪問する外国青年とホストファミリー双方の意向調査を踏まえて、一人ひとりが異なるホームビジットを体験します。それぞれの家庭で、観光やショッピング、日本料理を体験するなど有意義な時間を過ごしました。外国青年からは、島根の人たちの温かさ、生活文化、習慣に触れる特別な時間となった、木々が多く、海は広く、空は青く、環境が良い、島根の自然やまち並みの雰囲気が好き、また訪れたいなど様々な声が聞かれました。島根ならではの人、もの、自然と触れ合えたのではないのでしょうか。

ホストファミリーと一緒にパチリ!!
(世界遺産「石見銀山」龍源寺間歩)

これらすべての経験は、参加青年たちにとって、次のステップにつながる大きな成果になったことと思います。さらに、彼らは、これからの新しい時代を切り開いて、将来の北東アジア地域を担うリーダーとなってくれるものと期待しています。

「北東アジア交流の翼 in しまね」は、こうして基盤となる理念は堅持しつつ、時世や参加青年たちのカラーに合わせて、臨機応変に形を変えながら進化をしています。